

でも、
絶対帰りますから
ごめんなさいあなた…

セックス代行屋さん ～妻と見るネトラレ記録～



「ただいま……」

「おかえりなさい」

ぱたぱたとスリッパを鳴らして妻が駆け寄ってくる

「ただいま」

「おかえりなさい」

パッと笑顔が見えた時、少し疲れが飛んだ気がする



「ご飯出来てるけどどうします?」

「うん、先食べたいかな」

「はい、じゃあすぐ温め直しますね」

「うん」



「おっ、おっ」

「……」

「……なんだね」

「おいしそうに食べてるから見てるだけ」

「そう?」

（新婚か?）



「……今回もおかしね」

「ふふふ」

「あなた……！あの、明日はどうかしら？」

「……ごめんっ！仕事がさ……まだしばらく大変みたいで」



「そう……忙しいのだ、ごめんね……」

「……ごめん、ごめん……でも月末が過ぎれば落ち着くみたいだから、そしたら、ね！」

「いえ、こっちこそごめんなさい……!!
今日だってこんなに遅くまで…」

「ううん！来月は早く帰ってみせるから！」

（もう夜10時、むしろこんな時間まで起きて色々としてくれてたんだ…
来月は絶対……!!）



「わかった。楽しみにしてるね。
それじゃお先に、おやすみなさい」

「おやすみ」

（来月こそ絶対やる……!）



数日後

(月末までもう少し、そう思うと朝でも浮ついてくる)

「ねえ……あなた」

「……? どうしたの」

(分かってる。)

妻がこういう時は決まってエロいお願いに決まっている)



（先日から妻が頻繁にオナニーをしている）

（あからさまに上気していたり、やや匂ったり、
甘えた声になっていたり、バレバレなところがとても愛おしい）

（まあ今回も何かそういったHな話だろう）



「・・・そんなに相談しづらいこと？」

「これ、頼んでみたいな・・・って」

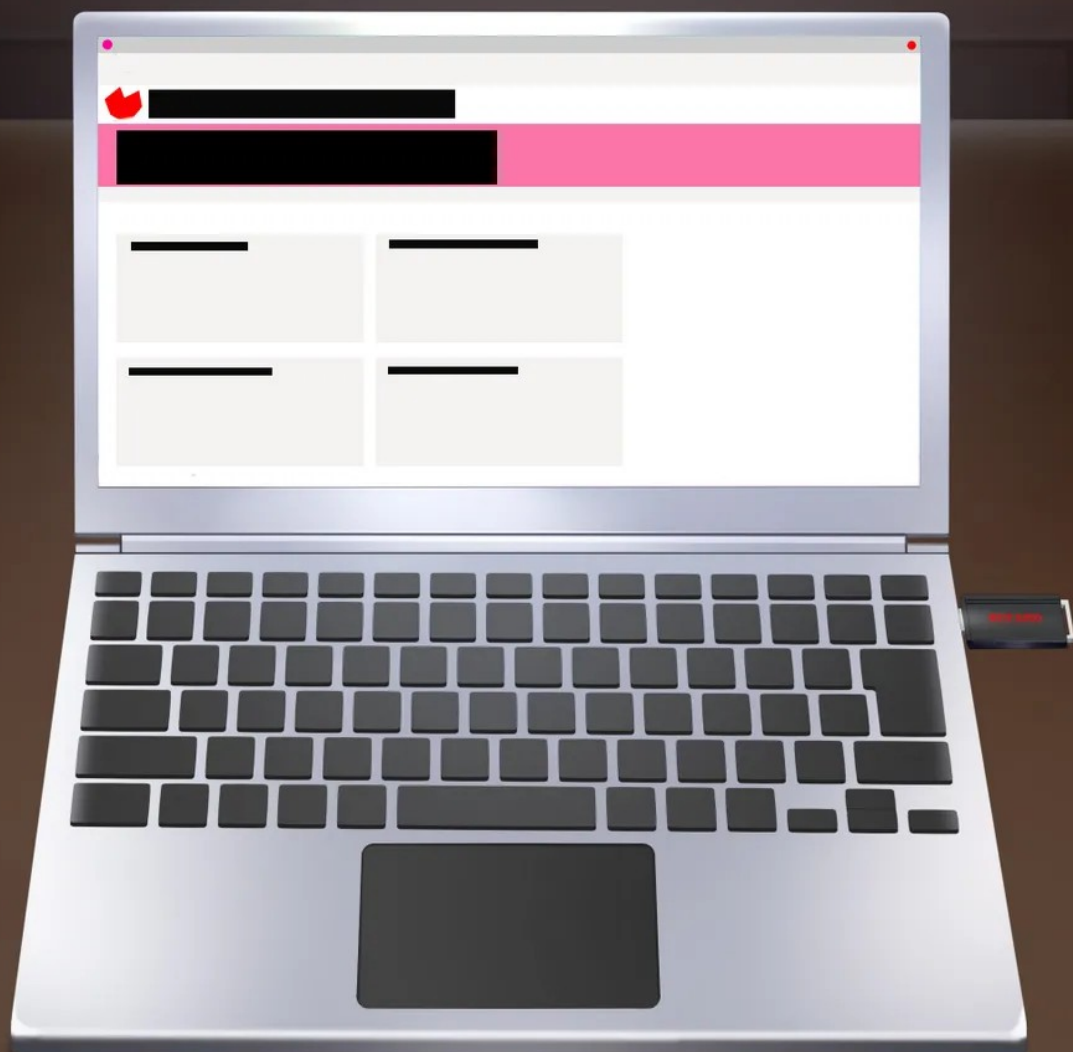
「？」



パソコンがそっと僕に向けられる

画面には日常ではおおよそ見ることのない単語が写っていた

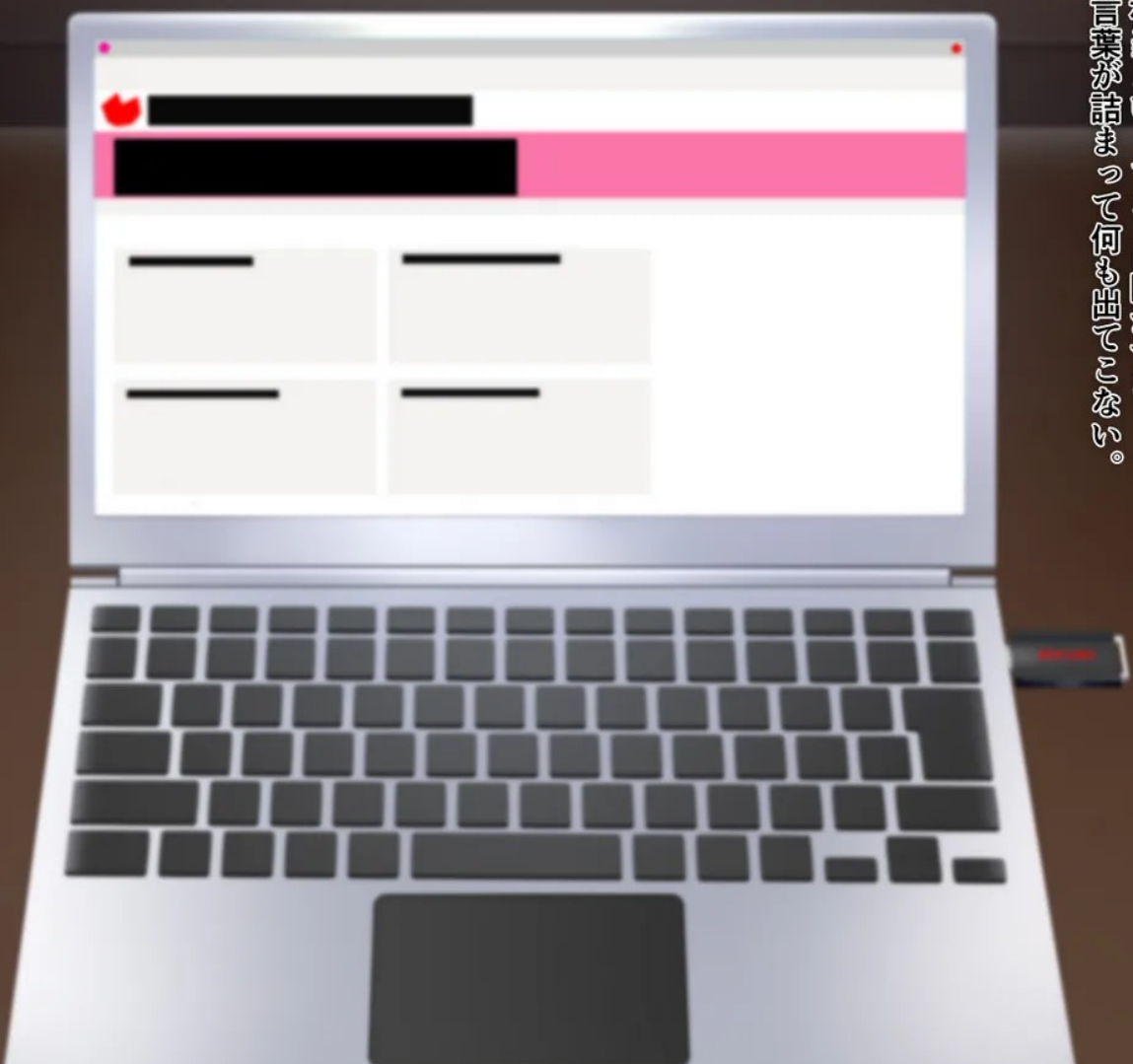
『セックス代行屋』



目の前の文章をぼろぼろ書してあげる

妻が、何か説明をしている。
なんだろう？何か言っている気がする。

相当きつっている。目眩がする。
言葉が詰まって何も話せない。



この時はまるで頭に入ってこなかったが、
書いてある内容はこうだ

性のお悩み相談のようだが本質はセフレの募集・スワッピング……
いずれにしても退廃的な快感を求める人募集というもの

「っ…っ…」

口を開けている筈なんだが、声が出てこなかった

「っめんなさいっ…忘れちゃったっ」



「……………ッッ！」

もう呆れに取って代わり怒りが沸いていた
妻がそんなことを言い出すことが許せない

言わせてしまった自分も許せなかったはずなのに

「いめんなさい……………もう寝ますね」

「…やってみれば」





「あん♡あっ♡あぁ♡らっ♡—!」

ん

パン

パン

オッ
ズ

ゆと
ゆと

あ

あ

画面いっぱいに妻の痴態が映り込む
ベッドの上でしか聞いたことのない喘ぎ声が鳴り響いている



「あなたに言われてね。行ってみたの」

「……っはっ……っー」

(声がでない。胸が苦しい)

ぐ

パン

パン

オズ
ズ

ゆっ
ゆっ

すっ

(こんなに苦しいのになんで君は笑顔なんだ?)

「怖かったんだけど。行ってみたらすごいスッキリしちゃった」



考えがまとまらない、画面から目が離せない



妻が僕の顔を覗き込んでいることに気づかなかった
同時に、勃起していたことにも



「ああー激しっー」

「イきますよっー奥さんッ」
(中で出す気がやめろっ!!)

あ♡

ぽん
ぽん
ぽん

ぽん

ぽん

びゅびゅ

びゅッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ

ズッ
ズッ

い♡

だめ♡

あ♡

ん♡

「あああああ♡♡♡んんんッ♡♡」

「はあ、はあ……♡」

「ふう……一旦抜きますよ」

「ああん♡」

すー♡
とろ♡
とろ♡

とろ♡

とろ♡

ん♡

とろ♡

とろ♡

とろ♡

ん♡

「どうでしたか？気持ちよかったですか？」

「聞かなくても……へたなこゝい」



「すいません、デリカシーなくて…」

「僕とても気持ちよくて、
奥さんも気持ちよくなっていただけでたら良かったんですが…」

しるし

ピクッ

ん♡

いっ
どど

ピクッ

ピクッ

フーッ
フーッ

ん♡

「……………気持ちよかったです」

「よかった！」



「あっ♡またおちんちん大きく…」

「奥さんの感じている姿を思い出しちゃってます…、
よければもっと見せてもらえませんか？」

「あん♡そんな押し付けながらお願いされたら…♡」

ピクッ

ん♡

ん♡

ピクッ

スリ

スリ

ん♡

フーッ♡

ん♡

「お願いされたら？」

「……………」



「私、こんなに声大きかったんだ…恥ずかしい」

「あなたも見て。あんなに跳ねて…この時すごく気持ちよかったの」

「奥さんっ。可愛い！可愛いですよ！」

じゃぽ

ぴん

「こうやって、ずっと可愛い可愛いっておだてられちゃって
久しぶりに可愛いなんて言われるから恥ずかしかったんだけど…」

うん

ぴん

ん

あ

あ

「見て♡イってる…可愛いって言われて
おまんこ突かれて、あなた以外のおちんちんでイってる…」



「あなた？ヨレ♡ズボンから出してあげましょ？」

「……こんなに大きくして♡
私のビデオで大きくしてくれたの？嬉しい……♡」

「うっ」

うっ♡

びん

うわ

ん♡

すあ♡

あ♡

「ペース…あげますよっ」

「突かれてるペースに合わせて♡しゅっしゅっ♡」

「あなた♡気持ちいいですか？教えてください♡」

「……ん……」

「こんなに硬くして…気持ちいいんですよ♡
…もしかして、いつもより大きくないですか？」

あ♡

い♡♡

「射精ます！奥さんっ！」

「あ、見て見て！私射精されますよ！」

(はい♡はい♡)

ん♡♡

ち♡♡

っ♡♡

ぴ♡♡

ん♡♡♡♡

あ♡♡

ぱ♡♡

ぱ♡♡

や♡♡

ぴ♡♡

ぱ♡♡

ぱ♡♡



「はあっ♡いっぱい！手から溢れちゃう…♡」

『ああ♡あん♡ダメエ♡んう♡イクウ♡』

あ♡

「こっちの私は何度も何度もイカされて…♡」

『おっ！んっ！んんん！』

「あんなに激しく乱れてたんだ♡」

ズボ

ズボ

びっ

「…あなた」

あ♡

あ♡

びっ

あ♡

妻と目が合った瞬間
妻の恍惚とした顔を見た瞬間切れた

「キヤッ！」

妻の手を乱暴に引っ張った

「あなた!?!」

「こっち来いッ！」



妻を寝室に放り込んで言った

「まあかゝゝまで淫乱だとは思わなかった!!」

「違っ…違うのあなた」

「軽率でした…っ、ごめんなさいっ！」

「いやー…こういう方が好きなんだろう?！」

「ごめんなさいっ!あなたっ…あなたあつ!!」





激しいセックスをした
初めて妻を抱いた。そんな気さえするような激しさだった

「…満足かい？」

「……いめんない。」

もう二度とあんな真似しません……」

「いや、君の淫乱さは前々から知ってたから…別に」

（何回オナってたところを見たよ……）

（淫乱……）

「他人を受け入れていたのは本当にショックだったけど
でも、こんなになるまで待たせちゃったのは僕だ！」

「嫌だけど、コレでスッキリしたのなら、もうそれでいいかなって…」

「ごめんね。ずっと独りにさせて……」

「私の方こそ、勢いに任せて……ごめんなさい！」

そうやってモジモジしている間に、

「今度はちゃんと聞きますね」

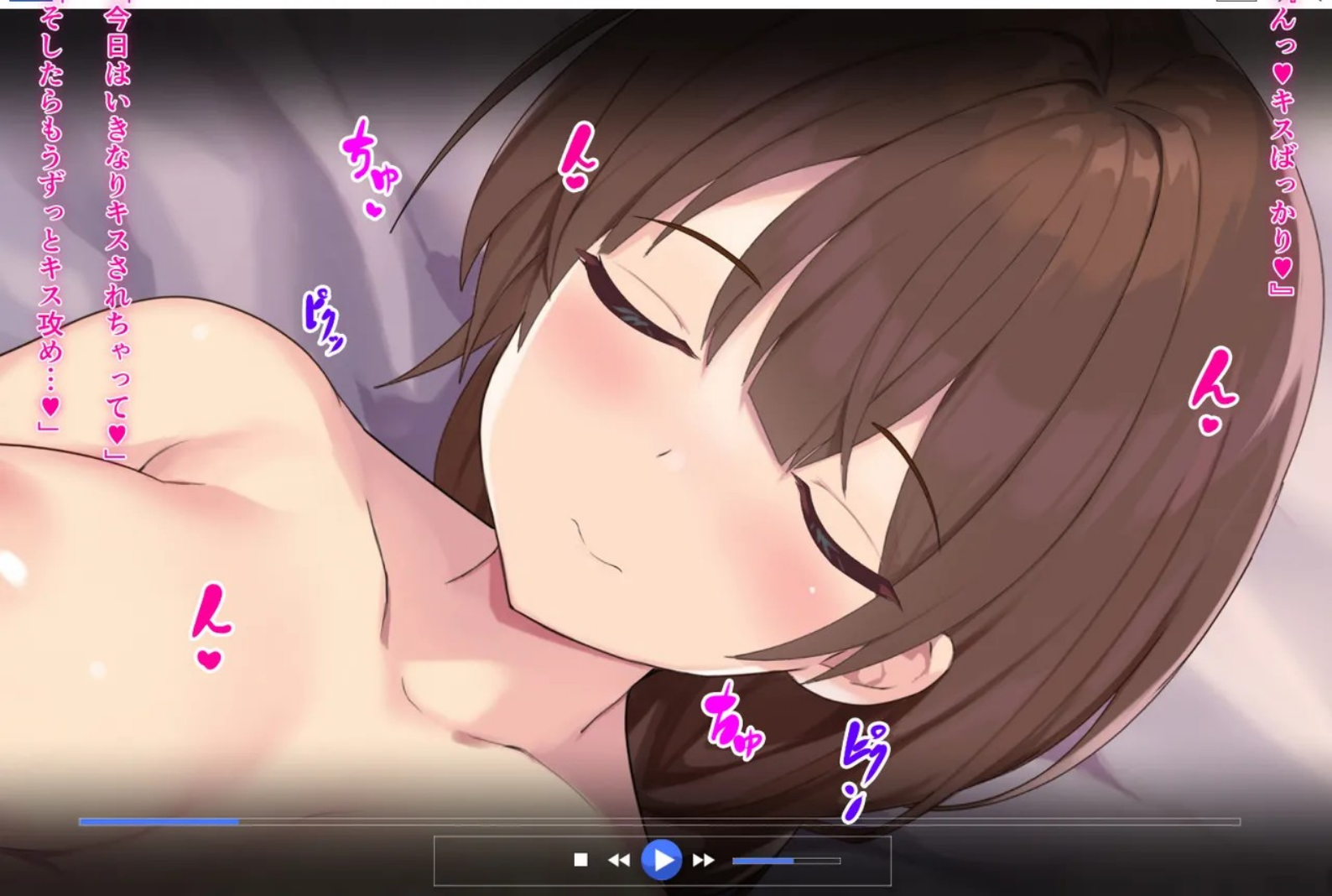
「あなた……もし、また行きたいって言ったら」

「止める？」

また数日後

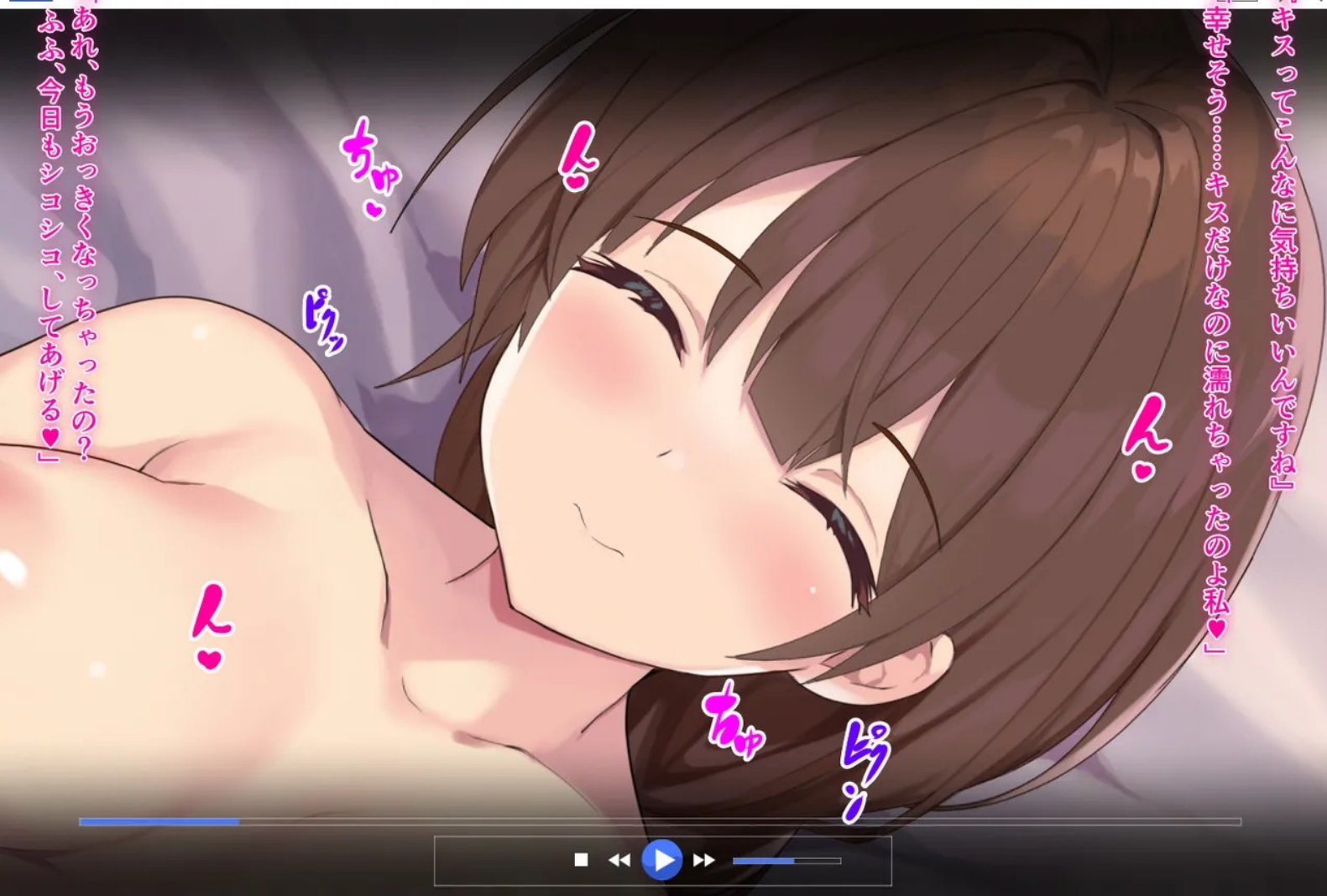
「んっ♡キスばかり♡」

「今日はいきなりキスされちゃって♡」
「そしたらもうずっとキス攻め…♡」

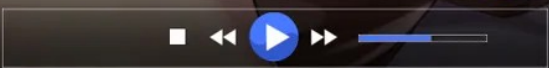


「キスって……んなに気持ちいいんですね」

「幸せそう……キスだけなのに濡れちゃったのよ私♡」



「あれ、もうおっきくなっちゃったの？
ふふ、今日もシヨシヨ、してあげる♡」



「キスし終わったところにはすっかり出来上がっちゃってね」

「ピクン♡ピクン♡って軽くイっちゃった♡」

ハッ♡

ハッ♡

ピクッ

ドゥ♡

アハハ

アハハ

ハッ♡

「そしたらベッドに押し倒されてね♡
脱がされて♡おっぱい揉まれて♡またキスされて♡」

「また何分経ったか分からないくらいずっとキスしてたの♡」

「…あなたのおちんちん、もうぬるぬるしてきた♡」

「あなたもキスするのっ…のっ…じゃあ」



「いっぱいエッチな姿撮ってきたから
今日も一緒に見ようね」

「……挿れてくださる♡♡」

「ほら♡もうびしょびしょ」

「んぎ」

「ん」

「ビクッ」

「ん」

「ん」

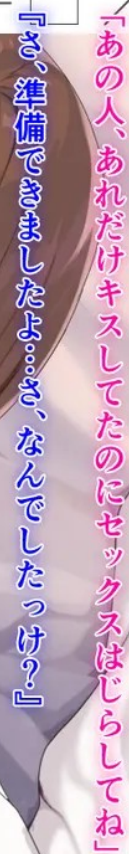
「ん」

「ふふ、ちょっと待ってください。カメラの準備がまだ…」

「見て、私のあそこ♡キスでどろっどろになれちゃってる♡」

「いじわるしないでよ……」





『さ、準備できましたよ……さ、なんでしたっけ？』



「良く言えまし…たっ！」

「あああああ♡挿入ってええ♡」

「ふふ、私ったら気持ちよくって腰くねくねしちゃってる…♡」

あ♡

あ♡

あ♡

ん♡

だ♡

だ♡

あ♡ズクン♡

「…なあっ…」

「…おもしろいっすのっ…」



×「カメラは……男が持ってるのか」

□「ええそうよ。前のはちよっと角度悪かったから
見やすい様にしてもらったの」



「…」

「よく見えるでしょ？私の繋がってるところ」

「ああ……綺麗だよ」

あ♡

「あ！そろそろ私イっちゃうわよ」



「あっ♡あっ♡ああ♡」

「ふふ♡ふふ♡ふふ♡の〜」

あ♡
ズズ

あ♡

ズズ
あ♡

♡

ズズ

♡

ズズ

♡

ズズ

♡

「何が…い…い…い…」

「あ♡♡♡♡」

「はい」



「んっんん♥おちんちん♥おちんちんですっ♥」

「もっと言っっ」

ズンあ♥

ズン

あ♥ズン

あ♥

ズンい♥

ズン

「おちんちんが気持ちいいんですう...♥」

「はっ!はっ!よく言えました...ッ! じゃあご褒美っ、あげましょうねッ!」

「あん♥はげしっ♥イク♥イっっちゃう♥」



「ああああああ♡♡♡♡!!♡♡♡♡」

あ♡

あ♡

イッ!

ズルン

ズン

ズン

ドレレレレ...

ズン

ズン

い♡

「おおおおーああっ」



「はあはあ♥キス…っ、キスしましよっ♡」

「はーっ♡」

ちゅ♡

ア♡

ビクッ

ちゅ♡

ー♡

ちゅ♡

んー♡

ビクッ

トラ♡
トラ♡

ちゅ♡

「んっ♡」

「んっ♡」

「んっ、もう動くんですか？」

「まだまだ、時間がもったいないですからね」



「いっばい気持ちよくなってももらいたいですし……」

「ふきなりっはげし……っ♡」

「あなたも気持ちいいっ」

「うん」

「アッ」

「ん」

「いっ」

「ん」

ビクッ

「いっ」

ビクッ

「いっ」

「ん」

「ん」

「ん」

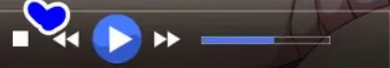
「イってます！イってますからあ！」

「この後私気絶しちゃったらしいんだけどね」

「えっ…大丈夫ッ!」

「あっ大丈夫！大丈夫。」

「特におかしいことはなかったから」



「心配しないで、代わりと言っては何だけどおみやげ貰ってきちゃった」

「あなた、見て。私のこれ♡」



あ♡

い♡

ぱん♡

い♡

ぱん♡

い♡

ぱん♡

い♡

あ♡

ん♡

い♡

妻が突然スカートに手を突っ込んだ

「一個、挿れっぱなしにして帰ってきたの♡」

スカートから出てきたコンドームには妻の愛液と

「今、出されてるやつかな？帰ってくる最中、
ずっとおまんこにこれが挿ってて」



「誰かに気づかれちゃうんじゃないかって」

「ドキドキしながら帰ってきたの♡」

画面のこいつが入っていた

「もし誰かに見られたら……裏われちゃったのかな?」
「……………」



「……ねえあなた♡
こんなゴムじゃなくて、あなたののでいっぱいにして♡♡
もし裏われても大丈夫のようにマーキングして♡
あなたのせーして♡ザーメンで♡」

「…ッ」

「いたっ、そんなに強く引っ張らなくても逃げませんでしたら」

「うんうんー『絶対に済む』と思うんだよ」

「ごめんなさい…でも、キス…キスして
全身、あなたでいっぱいにして♡」







「あっ♡あっ♡あっ♡」

「イクウ♡またイク♡」

「私も…っ！おぉッ！」

！♡

ズィィ

ズィィ

あ♡

ズィィ

ズィィ♡♡♡♡♡

ズィィ

♡♡

ズィィ

ズィィ

！♡

「んっ…んん♡」

「おお……中に出しちゃいましたけど」

「今日は大丈夫なんです♡」

「さっき薬飲みましたのでっ♡中でっ♡大丈夫っ♡」

「動きながら言うことですか……っ！」

「激しっ♡興奮したんですか……？」

「する前からゴムしなくていいって話したじゃないですか」





「んっ♡んっ♡んっ♡」

「ふっ…ふっ…ふっ…」

「あ、膨らんできました♡射精るんですね？」

「っ♡」

パニッパニッ

ちゅ

ちゅ

ちゅ

パニッ

んっ♡

っ♡っ♡

パニッ

パニッ

んっ♡

「射精♡してください♡」

「あっ！もっと激しく♡」



「いっ！いっ！いっ！すー♡♡♡」

「私もまたイきますー！」

あ♡

ズイッ

びゅん

びゅん

ズイッ

ん♡

びゅん

ズイッ

！♡

！♡

ズイッ

びゅん

「ああ♡あん♡♡」

「イっくっ♡イっくっ♡♡」





「なにが小さくなったのか、ちゃんと言って」

「え？もう……おちんちん♡おちんちんです♡♡」

「よく言えまし………だっ！」

↑♡↑

ドクッ

↑♡↑

ん♡

リッ

↑♡↑

じゅぽ

じゅぽ

じゅぽ

「あんっ♡」
「いきなり突いて♡こんなこと言わせる悪い口は塞いじゃいますっ♡」
「んっ♡」





「あっ♡あっ♡あっ♡膨らんで♡おっき♡」

「おおお…激しいですッ奥さんっ!」

「ダメえ♡腰が♡勝手に動いちゃう♡」

あ♡

ん♡

あ♡

ん♡

ん♡

ん♡

ん♡

あ♡

ん♡

ん♡

あ♡

ん♡

「めんなさ♡♡♡っちなごですが♡♡」



「私ばかり気持ちよくなっちゃって…♡」

「こっちこそ動いでもらって悪いです！
それと僕も気持ちいいです……！」

あ♡

んん

あ♡

んん

んん

んん
んん

んん

あ♡

んん

んん

あ♡

んん

「よかった。じゃあ……もうと気持ちよくなっちゃっていいね♡」

「あっ♡あっ♡まだ出るんですかっ♡すっ♡すっ♡すっ♡」

「私ったらあんなに必死に腰振って…♡」

あ

「ああ、またイってますよ。すっ♡すっ♡すっ♡」

「あなたもイきそうですか？」

あ♡

パン

あ♡

パン♡

パン♡

パン

あ♡

「あっ♡あっ♡…♡あっ♡あっ♡あっ♡」

「また濃い♥あなたも負けてないわね」

「お前が撮って来てくれたから……」

「うん！撮ってきてよかった」



「あ、映像終わっちゃった」

「あなたも気持ちよかった？」

「アア……今回もよかったよ」

「…あなた、今日はしないの？」

「ふ…ふふ……どんだけ淫乱なんだお前は」

「ごめんなさい、あなた…でも私、あなたとしたい」

「今日もあなたでいっぱいにして♡」

すり♡

「ああ…じゃあ今日は上になってもらおうかな」

すり♡

「私もそうしたいと思ってたの！じゃあ私が上になりますね♡」



「ねええ？次回のことなんだけど……」

「……どうも、ごうじゅんさん」

「えーんのかー」



「ん？行きたいんじゃないの？」

「ううん、ありがとうあなた！愛してる♡」

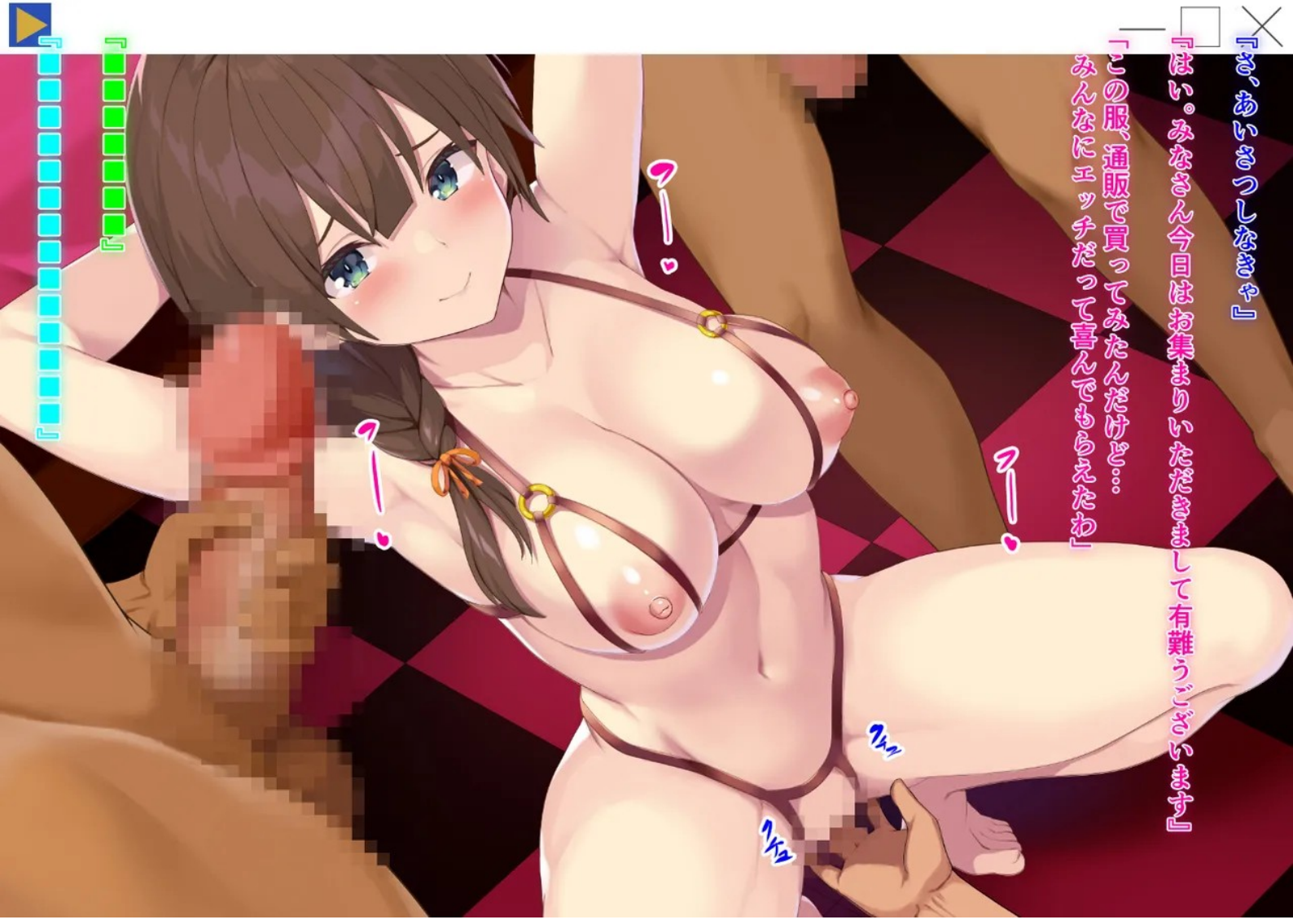
「楽しんでる……」

「あなたのためにもっとイイの、撮ってくる……♡♡」

「あ、あつしなや」

「はい。みなさん今日はお集まりいただきまして有難うございます」

「この服、通販で買ってみたんだけど...
みんなにエッチだって喜んでもらえたわ」

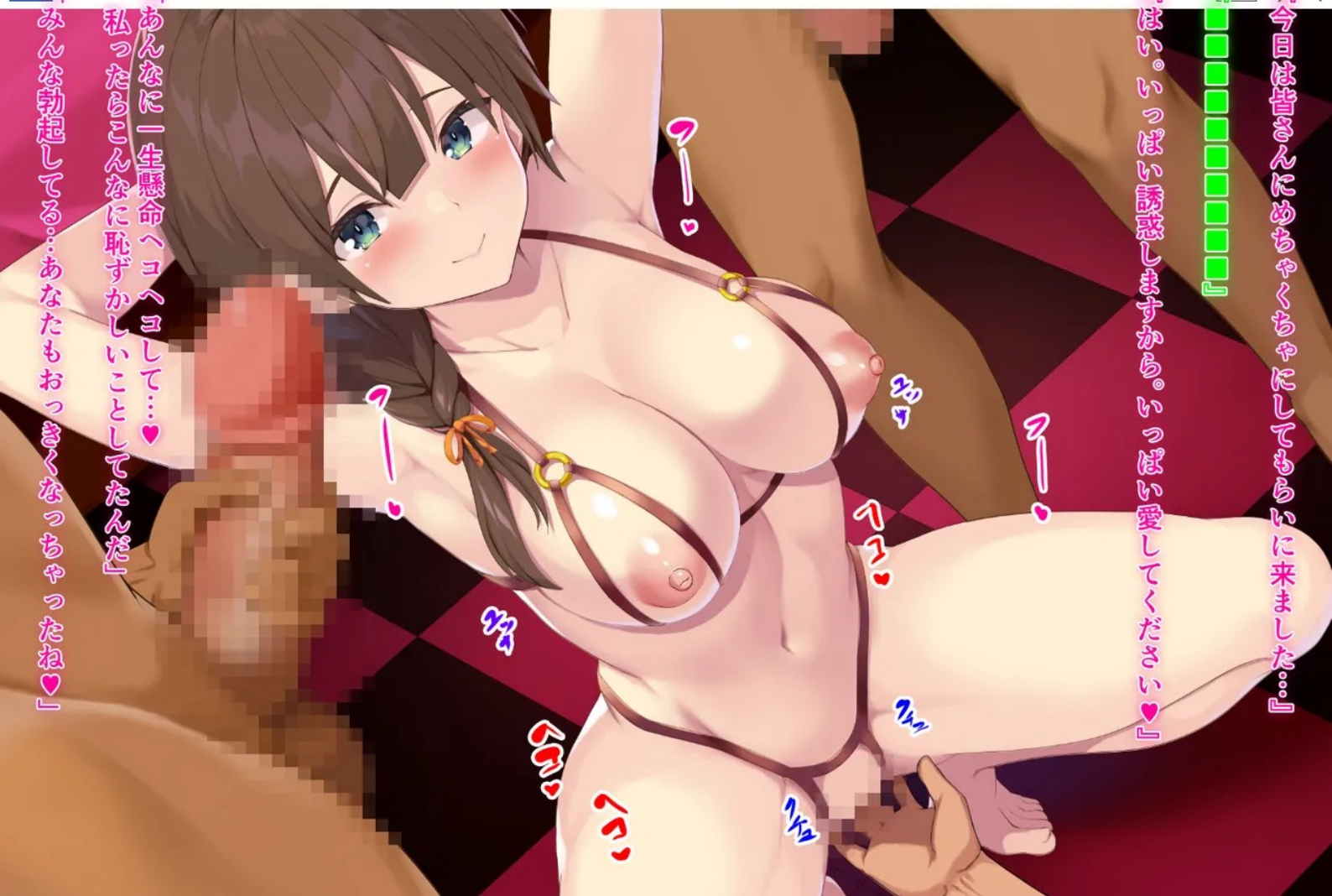




「はい。いっぱい誘惑しますから。いっぱい愛してください♡」



「あんなに一生懸命へこへこして…♡ 私ったらこんなに恥ずかしいことしてたんだ」



「みなさん素敵じゃ…」

「見とれてちやダメですよ」

「あっ♡はっ♡♡もっ♡と♡やらしく振りますから…♡もっ♡とお♡♡」

♡——♡

ちゅ

っ♡

ちゅ

ぱっ

んっ

んっ

ん——♡

♡——♡

いっ♡

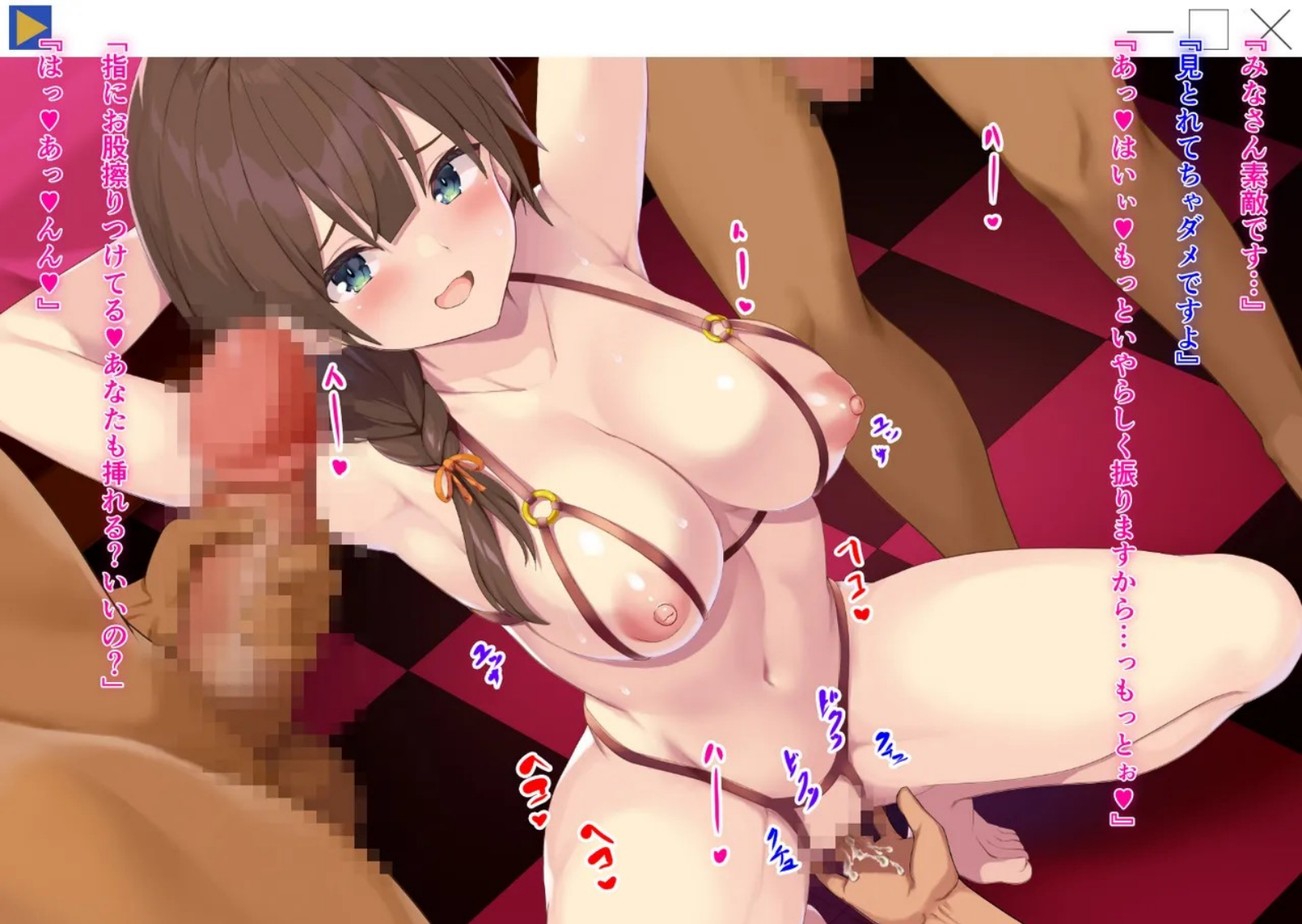
いっ♡

ちゅ

♡——♡

「指にお股擦りつけてる♡あなたも挿れる？いいの？」

「はっ♡あっ♡ん♡ん♡」



「あつ、シヨシヨ始まった」

「ねえ。手前のおっきいちんちんの人いるでしょ？」

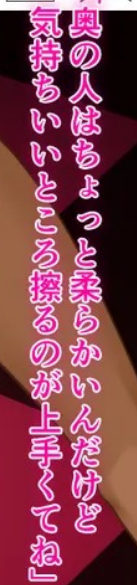
「この人、私の膣内に入れたらもっと大きくなってね♡」

「ゴリゴリして気持ちいいんだけど

乱暴に突いてくるから壊れちゃうかと思っちゃった♡」

「イってるのに♡子宮が潰れるくらい押し込まれて♡
またイかされちゃうの♡」





「挿れたら最後、何度射精しても子宮から離れなくてね
もうずっとイカさればなしになっちゃうの♡」



「そうとも知らずにあんなにうっとり見つめちゃって♡
みんなに散々泣かされるのも知らずに可愛いわね私♡」

「愛液がだらだら垂れて来ましたね」

「はい…♡指気持ちいいの♡
みなさんのおちんちんが素敵で……♡」

「ごめんなさいあなた…私」



「おちんちんに囲まれて……ずっと甘く感じてましたぁ♡」

「おちんちん近づけられただけでイっちゃう変態になっちゃった♡」

「みなさんおちんちんビクビクしています♡出るんですか？
じゃあ……かけてください♡私にいっぱいぶっかけ♡」

「出ますよっ！奥さん！」

「お願いします♡くださいっ♡」

「おおおおお！くー！」

「ああ♡あつっ♡」

いんいん

♡♡グチャグチャ♡

ちゅ

グチャグチャ♡

ちゅ

グチャグチャ♡

ん♡

いんいん

ビクッ

グチャグチャ♡

ビュッ♡

グチャグチャ♡

グチャグチャ♡

グチャグチャ♡

グチャグチャ♡

ビュッ♡

ああ♡

ビュッ♡

「そろそろ奥さんもちゃんとイきましょ？」

「あっ♡んっ♡指はげしっ♡イクッ♡イクっ♡」



「あぁっ♡いっぱいっ♡すごく♡♡」

[illegible]

ドン
お♡

2.4

↑

7x7x7

22

グキクキク



二



ひつ

お

2!

おー！
ビュ
ビュ

「おっ♡ほッ♡おっ♡おっ♡あぁ♡
イク♡やめ♡♡激しすぎますぅ♡♡」



「はあ…はあ…」

「疲れちゃいましたか？」

「ふふ、全然大丈夫です」

「そうは見えねえけど」

「本番♥本番しましょう♥」

「疲れちゃったおちんちんは元気にしますからあ♥」

「これから本番……♥」

「見て…。大好きなおちんちんに
メチャクチャにされちゃうと…」
……………♥♥」





『どうぞ。いっぱい使ってくださる♥』

『それじゃ遠慮なく……ッ!』

『ああああああ♥挿入ってきますう♥』

『もう挿入れちゃったんか。じゃあシコって』

お♥

グッ

お♥

グッ

グッ

お♥

お♥

グッ

お♥

お♥

『はー。いっぱい使ってくださいね』

『あ♥ビクッとした♥お手で気持ちよかったですか?』

「俺のに集中してよッ」

「あんっ♡待って♡まだ動いちゃ♡シンん…♡
こっちのおちんちんも♡」

「ちんこに囲まれて幸せそうだな」

「いったい何人食ってきたんだ？」



「ええと♡あの人とその代行さんだけですっ♡」

『あの人…って旦那さんか？
こんなことしてて何か言うことないのかよ』

『あの人？』

『カメラこっちですよ』

『あなた……見て♡』

『私、好きでもない…
知らない人達とセックスしちゃってます♡』

『それいい奥さんっ！』

『あっ♡あっ♡今は…っいや♡動いちゃだめえ♡』



「……最初はね。

あなたと一緒に忘れられると思ったんだけど」

「あなたに抱かれる度に他のおちんちんを思い出しちゃうの」

「気が付いたら、またおちんちんが欲しい……って」

「だから、この人達にいっぱい気持ちよくしてもらいますね」
「あなたはこの録画で気持ちよくなってるね」





「ありがとうございますう♡ありがとうございますう♡」

「敏感になったおまんこに…あんなバキバキのちんちん突っ込まれて」

お♡

「いい♡好き♡ちんちん♡ん♡スキ♡」

「膣壁を擦られて…子宮口を執拗に突かれて。

何度もイってとね…今度は奥が熱くなってくるの」

お♡

パン♡

お♡

パン♡

ち♡

「ああああああああ♡奥いい♡」

「子宮が孕もうとしてるんだ…って♡」

パン♡

パン♡

パン♡

パン♡

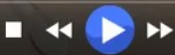
あ♡

パン♡

パン♡

あ♡

パン♡



「だって、見て♡こんなに情熱的に子宮ノックしてくるんだもん♡」

「身体が孕みたがっても仕方ないよね♡」

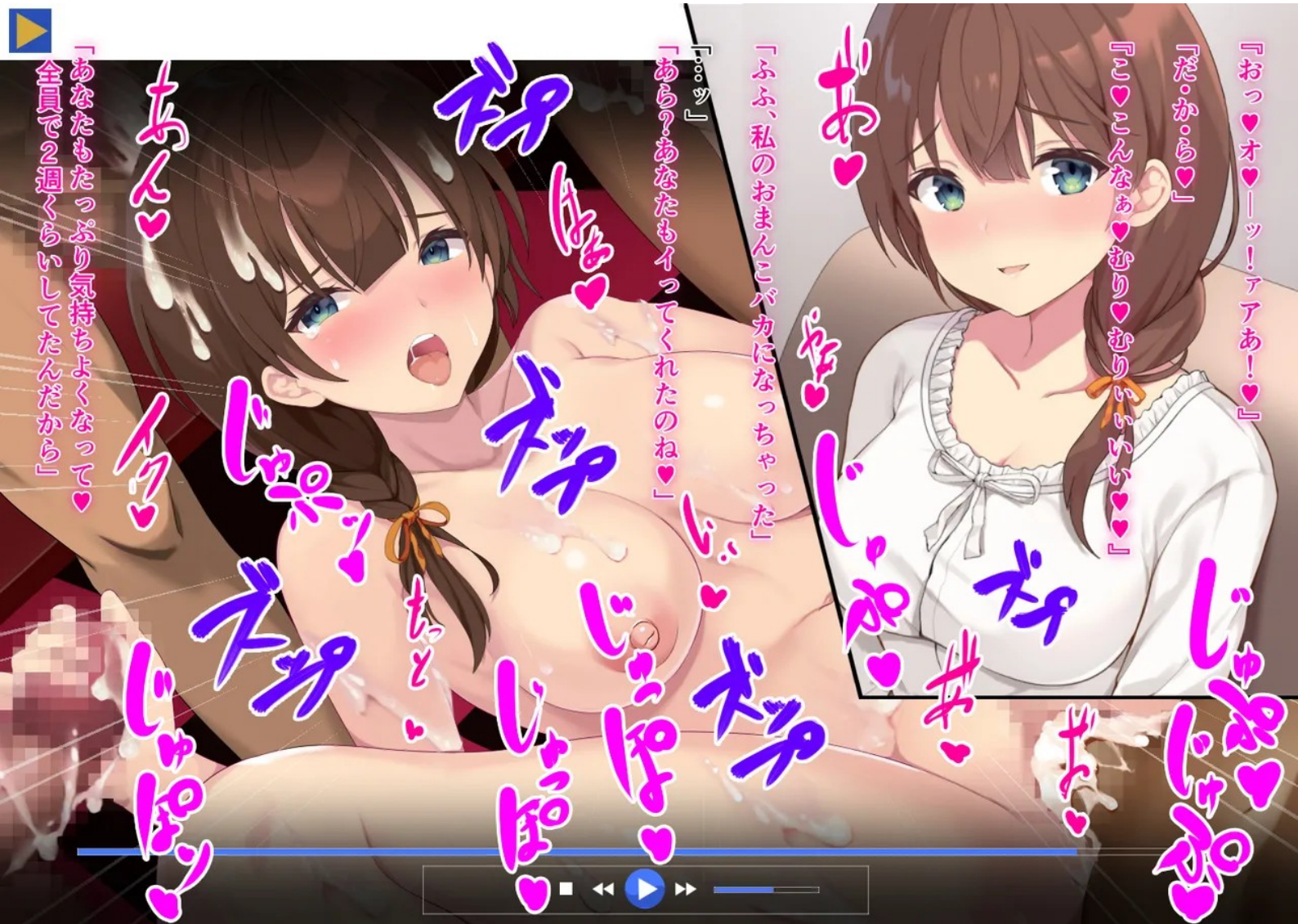
「ああ♡いっぱい♡精子♡」

「あなた…あなたも出たんだ…でも、これからよ♡」

「あなたでも代行さんでも無い……ホントの他人の精子がこれからいっぱい注がれちゃうんだから♡」
「次？ああああ♡入っいいいい♡」







「おっ♡オ―ツ！アアあ！♡」

「だ・か・ら♡」

「い♡んなあ♡むり♡むり♡ふっ♡ふっ♡」

「ふふ、私のおまんこバカになっちゃった」

「あらっ」

「あらっ、あなたもイってくれたのね♡」

「あなたもたっぷり気持ちよくなって
全員で2週くらいしてたんだから」



「私を見ながら…犯してください♡」

「あなた…」

「来てください…♡さっさからずっとな欲しかったの♡」

「ピルも…ゴムも…使わないで……」

「……あなたもこっち使いませんか？」

あなた♡

あなた♡

あなた♡





あれから数カ月、まだこの歪な遊びは続いている

妻は代行屋を通してかなりの人数とも遊んだようだが、離婚や出ていくような話はしていないし、他人を家に入れた痕跡も今のところない

ある時、恐る恐る今の生活について聞いた妻曰く「あなたと結婚して今でも幸せよ」と、自分が輪姦されている映像の前で言ってきた

さらに後にして知ったことだが、どうやら妻は挿入されている時に別人のことを考えているらしい。いつからそうなったのか自分でも分からないそうだが、おそらくは最初からそうだったんだろう。

セックス代行屋なんていう他人に抱かれた際に私のことを想っていたんだろうか。

私に抱かれながら他人のことを想像していたんだろうか。

いずれにせよ取り返しがつかない以上、僕も楽しむことにした。今後、何か待ち構えているのか分からないが。

映像の中の妻はぼくのことを考えてくれているのだから。



END